

源氏物語画帖「源氏御手かゝみ」(同志社大学所蔵)の紹介

岩 坪 健

はじめに

近年、同志社大学が所蔵することになった「源氏御手かゝみ」という名の源氏物語画帖について紹介する。この作品(以下、本画帖と称する)は、その存在も知られていなかった新資料である。

一、本画帖の書誌

まず、書誌から述べる。本画帖は布に包まれ黒漆箱に入れられ、箱の寸法は縦三四・六、横三一・〇、高さ二〇・八センチで、箱書はない。本画帖の表紙は緑色地に梅花散らしの布で縦二七・八、横二四・六センチ、外題も内題もない。形状は折本型式で、源氏物語五十四帖から物語本文を抜き書きした色紙を右に、それに対応する絵を左に配して貼られている。料紙の大きさは詞書も絵も同じく縦

源氏物語画帖「源氏御手かゝみ」(同志社大学所蔵)の紹介

一七・四、横一六・〇センチで、いずれも五十四枚揃っている。詞書を記した絹布には十二弁と十六弁の菊花模様、金色と青色に刷られている。斐紙に描かれた絵は淡彩で、全図に金泥の霞引きが見られ、用いられた金も顔料も上等である。また、色紙も台紙も周囲は金で縁取られ、さらに台紙には一面に金箔が散らされた豪華本である。このほか詞書の筆者目録を記したものが添えられ、その包紙に「源氏御手かゝみ 筆者目録」と墨書されている。

二、詞書の本文系統

現存最古の源氏絵である『国宝源氏物語絵巻』の詞書は、ところどころ本文が省略されている。本画帖は第十九帖(薄雲の巻)にのみ中略が見られ、贈答歌のあと、「のとかにをとなくさめ給。さること、はおもひしつむれと、えなむたへさりける」(六〇八頁2行

目)^①の箇所が抜けている。

詞書の本文系統を『源氏物語大成 校異篇』で調べると、青表紙本系統の三条西家本(三条西伯爵家蔵)に最も近い。とりわけ以下に挙げる三例において、本画帖の本文と一致するのは三条西家本しかない。

1、第五十帖(東屋の巻)の「なのりをせさせたまひければ」(一八四四頁9行目)の一節は、『源氏物語大成 校異篇』の底本では「なのりをせさせ給へれば」とあり、三条西家本以外は底本と同じである。

2、第五十一帖(浮舟の巻)の末尾は、「みかはしたらむにてた^aに、めつらしきなかのあはれ、おほくそひぬへきほとなり」(二八八八頁2行目)で終わっている。『源氏物語大成 校異篇』の底本は傍線aの「にて」を欠きbは「おほかりぬ」、他本にもbが「おほかる」など異同があるのに対して、三条西家本のみ本画帖と同文である。

3、第二十八帖(野分の巻)の、「御前のかたをみやり給へは、みかうし、ふたまはかりあけて☆人々ゐたり」(八七〇頁5行目)の☆印の箇所に、『源氏物語大成 校異篇』の底本には「ほのかなるあさはらのほとに、みすまきあけて」の一節がある。一見、本画帖の単なる脱落のように思われるが、三条西

家本にもない。その箇所は青表紙本の他本にも河内本にもあり、本画帖と三条西家本にのみ無いことから、両者の深い関係が知られる。^③

三条西家本は現在、日本大学図書館所蔵で、奥書によると三条西実隆が七十七歳の享祿四年(一五三一)に、子息の公条・公順の協力を得て完成した。その後、後陽成院・靈元院・桜町天皇の時にそれぞれ書写され、今でも宮内庁書陵部に収められているほど、宮中において重んじられた写本である。一方、それらとは別に書陵部には、実隆の花押が押された五十四帖があり、巻名は後柏原天皇筆である。奥書により実隆が四十六歳の明応九年(一五〇〇)から永正三年(一五〇六)までの間に書写されたとされる。当写本は影印があり、先の三例の箇所を調べると、すべて本画帖すなわち三条西家本と一致しない。^④

三、絵の場面設定、構図

次に、絵の考察に移る。本画帖には場面の設定や構図において、他の作品^⑦には見られない図が散見される。

A 第二十五帖(蜩の巻)

まず詞書を全文引用する。「宰相の君とて、手なともよろしくかき、おほかたもおとなひたる人なれば、さるへき折々の御かへりな

とか、せ給へはめしいて、言葉などのたまひて、か、せ給ふ」

(八〇六頁9行目)。これは玉鬘に送られてくる多くの恋文に対して、養父の光源氏が宰相の君という女房を呼び出して返事を指示している箇所である。このあと求婚者の一人である宮が訪れ、源氏が蜚を放つという、当巻を代表する名場面が続く。絵では室内に源氏と玉鬘が向かい合い、隣室に手紙を両手で広げて持つ女房が控えている。この場面を描いた例は、管見の限り見当たらない。

B 第五十帖（東屋の巻）

当巻は『国宝源氏物語絵巻』では、薫が浮舟の隠れ住む三条の小家を尋ねたところを描いている。簀子に薫が腰掛け、室内では薫より早くに訪れた弁の尼が浮舟たちと話をしている。一方、本画帖では室内に薫と弁の尼が対面しているだけで、ほかの人物は見られない。詞書は、薫と呼ばれた弁の尼が「とくちにいさりいてたり」（戸口にいざり出た。一八四四頁9行目）のあたりで終わり、そのあと薫が簀子に座る場面に移る。よって本画帖の詞書の箇所は、まだ薫が戸口にいる段階であり、絵とは合わない。そのあと物語では薫が入室して浮舟と会うが、弁の尼と薫が話すのは翌朝であり、本画帖がどの場面を描いたのか釈然としない。

C 第三十五帖（若菜下の巻）

当巻の巻頭近くに、六条院において競射が催されたとある。その

源氏物語画帖「源氏御手か、み」（同志社大学所蔵）の紹介

図は『石山寺蔵四百画面 源氏物語画帖』や『九曜文庫蔵 源氏物語扇面画帖』にも見られる。しかしながら本画帖は弓を射る人が片肌を脱ぎ、背中の左半分も肌が見えている点が特異である。他の作品は脱いでいないし、そもそも源氏物語絵において肌が露わな描き方は珍しい。もともと『国宝源氏物語絵巻』では自邸にいる雲井雁に二例見られ、夜中に泣き出した乳児に乳を含ませているところ（横笛の巻）と、衣一枚で腕などが透けて見えるところ（夕霧の巻）である。けれども後世の作品では肌の露出はなくなり、とりわけ源氏絵が婚礼道具になった江戸時代ではまず見られない。

本画帖の類例としては『北野天神絵巻』が挙げられる。菅原道真が二十六歳のとき、弓場で弓を射ると百発百中であつた、という場面である。今まさに弓の弦を引き絞る道真の姿を承久本『北野天神絵巻』は前方から、弘安本『北野天神絵巻』は後方から描くが、いずれも左腕と上半身の左半分近くは肌が見えている。

D 第四十六帖（榎本の巻）

詞書は巻頭近くで、匂宮たちが宇治に泊まったとき、対岸に住む八の宮から薫に手紙が届き、匂宮が代わりに返歌した箇所である。『源氏物語絵詞』に、「宇治、匂宮まいり給。公家、多あるへし。大臣の子共あるへし。ご、すくろくあるへし。もとよりかはらけ、とりくあそひのてい、くわんけんあるへし。宇治のはたなり。タき

りの公達、六人あるへし。其外あるへし。」と記されたように、匂宮の外出には大勢の臣下たちが同伴している。この場面を描いた和泉寺久保惣記念美術館蔵『源氏物語手鑑』には、少年も含め計八人もいる。ところが本画帖では二人しかない。

本画帖に似た図が、『九曜文庫蔵 源氏物語扇面画帖』椎本の巻に見られる。部屋の内にある烏帽子姿は手紙を広げ、端にいる冠姿と向き合っている構図は本画帖と共通する。ただし九曜文庫は同じ巻ではあるが別の場面で、八の宮が亡くなり見舞いの使者を送った匂宮が、返事を見ているところである。よって本画帖に描かれた二人は匂宮と薫だが、九曜文庫は匂宮と使者になる。

E 第十帖(賢木の巻)

本画帖は光源氏が頭中将たちと韻塞うんそくに興じている場面である。絵には室内に四人の男性がおり、一人は本を手を持ち、他の三人は畳の上に冊子をそれぞれ置いている。この書物を恋文に置き換えると、本画帖にも描かれた雨夜の品定め(帚木の巻)と同じ図様になる。

賢木の巻の詞書を全文引用すると、「又、いたつらにいとま有けるはかせともめしあつめて、ふみつくりぬふたきなどやうのすさひわざともをもしなと、心をやりて、みやつかへもおさくし給はす」(三七二五)とあり、まだ博士たちを呼び寄せた程度である。

物語はこのあと、大勢の専門家を呼び韻塞を盛大に催して源氏が勝ち(甲)、負けた中将は負態まげざうをする(乙)と続く。甲の図はパーク財団蔵、乙は『石山寺蔵四百画面 源氏物語画帖』や承応三年版本に取りあげられているが、本画帖の場面は管見の限り見出せない。

以上のA~E以外にも、本画帖には稀な例が多い。たとえば、男踏歌の翌日を描いた場面(第四十四帖、竹河)は承応版本の挿絵(山本春正画)が取りあげただけで、肉筆画には見当たらない。そのほか三つの香炉から煙が出ている図(第三十八帖、鈴虫)は、土佐光則筆「白描源氏物語画帖」(パーク財団蔵)の図柄に似ているが、類例は少ない。また、匂宮が中の君の横で琵琶を弾いている図(第四十九帖、宿木)は、国宝源氏物語絵巻にも見られるが、匂宮が中庭の向こう側にいる女房たちを眺めている構図は珍しい。そのほか第四十五帖(橘姫)は、宇治の八の宮邸で薫が垣間見しているという、この巻を代表する名場面である。しかしながら薫は通常、地面に立っているのに対して、本画帖は簀子上がっているし、また描き忘れたのかもしれないが、琴が見当たらない。

四、詞書の筆者目録

本画帖には筆者目録が添えられ、詞書を執筆した人々の名が記されている。その全文を翻刻するにあたり、各帖の頭に巻の通し番号

(15) を付け、改行は／で表わす。

源氏物語詞書／筆者目録／1きりつは 鷹司房輔公／2は、き
木 大覚寺性真法親王／3うつせみ 飛鳥井雅章卿／4ゆふか
は 烏丸光雄卿／5わかむらさき 油小路隆貞卿／6すゑつむ
はな 妙法院堯恕法親王／7もみちの賀 青蓮院尊證法親王／
8花のゑん 西園寺實晴公／9あふひ 大炊御門経孝公／10さ
か木 持明院基時卿／11花ちるさと 日野弘資卿／12すま
梶井慈胤法親王／13あかし 花山院定誠公／14みをつくし 今
出川公規公／15よもきふ 白川雅喬王／16関屋 万里小路雅房
卿／18松風 清閑寺熙房卿／19うす雲 梅小路定矩卿／20朝か
は 有栖川幸仁親王／21乙女 大炊御門経光公／22玉かつら
柳原資行卿／23はつね 阿野季信卿／24こてふ 庭田重條卿／
25はたる 愛宕通福卿／26とこ夏 葉室頼孝卿／27かゝり火
二條光平公／28野分 九條兼晴公／29みゆき 聖護院道寛法親
王／30ふちはかま 九條忠榮公／31まさきはしら 坊城俊廣卿／
32むめかえ 中御門資熙卿／33藤のうら葉 中院通茂公／34わ
かな上 曼殊院良尚法親王／35わかな下 堀川則康卿／36柏木
東園基賢公／37よこふえ 田向資冬朝臣／38すゝむし 勸修寺
経慶公／39夕きり 河鰭基共卿／40御のり 五條為庸卿／41ま
ほろし 今城定経卿／42にほふみや 倉橋泰吉卿／43紅梅 東

源氏物語画帖「源氏御手かゝみ」(同志社大学所蔵)の紹介

坊城知長卿／44たけかは 中園實満卿／45はしひめ 難波宗量
卿／46しのかもと 小倉實起卿／47あけまさ 久我廣通公／48
さわらひ 知恩院尊光法親王／49やとり木 萩原眞從卿／50あ
つまや 日野西園豊卿／51うきふね 梶井盛胤法親王／52かけ
ろふ 一條教輔公／53てならひ 近衛基熙公／54夢のうき橋
聖護院道晃法親王
右御筆者座次不尋常／是は銘々卷々を探り／取て書給ひし成へ
し／源公風記之
第十七帖(総合の卷)の卷名と筆者を欠くが、詞書と絵は現存する
ので脱落したのであらう。ことによると転写の過程で抜けたかもし
れない。

末尾の「源風公」という人名は、宮内庁書陵部蔵「三十六人歌合
巻物形」一卷(函架番号、一六二・二七九。御歌所本)にも見られ
る。それは三十六歌仙の和歌を一人一首ずつ半丁に散らし書きした
冊子であり、末尾の識語に彼の名が見られる。その全文に適宜、句
読点と改行の印(〽)を付けて翻刻する。

右者、巻物に書ときの書／法也。

右、入木道伝授之一卷、必不可有他見。／被背此旨者、可被
蒙違誓約之罰者也。／仍如件

源公風謹誌之

右の奥書、および本画帖の「筆者目録」により、源公風は能書家で鑑定もしていたかと考えられる。

巻頭歌(柿本人麿詠「ほのほのとあかしの浦の」歌)に「世尊寺」と書き込まれていること、また冊子本なのに書名は外題も内題も「三十六人歌合巻物形」で「巻物形」とあることから推測すると、書陵部本の祖本は書道を家業とする世尊寺家の誰かが書いた巻物、あるいは卷子本に書くための手本の写しであろうか。なお、書陵部本が源公風の自筆本なのか、それとも転写本なのかは判然としない。

さて、巻の順で古来、問題にされたのが蓬生・関屋(第十五・十六帖)と紅梅・竹河(第四十三・四十四帖)である。源氏物語の梗概書で最も流布して、近世には何度も版を重ねた『源氏小鏡』の場合、系統などにより異なるものの概ね本画帖とは逆である。現存する最古の注釈書である『源氏釈』も関屋の次に蓬生がくるが、中世の主要な注釈書(『河海抄』『花鳥余情』『細流抄』など)や、十七世紀に刊行された『首書源氏物語』『湖月抄』などは本画帖と同じ順である。

五、筆者の身分、生没年

目録に記された五十三人の中には改名した者が五人いるが、五人とも前の名が記されている。後の名を示すと、23阿野実藤、30九条

幸家、38勸修寺経敬、39河鰭実陳、43東坊城恒長である。

筆者は全員男性で天皇・上皇は見られず、親王は20有栖川幸仁親王(後西天皇の皇子)のみ、王も15白川雅喬王しかない。法親王は九人で、その内訳は後陽成天皇の皇子が三人(6 12 54)、後水尾天皇の皇子が五人(2 7 29 48 51)、智仁親王の皇子が一人(34)で、後水尾天皇の皇子が半数を占める。参考までに歴代天皇の系図を示す。

後陽成天皇——後水尾天皇——後西天皇
智仁親王

公卿は四十一人おり、家格で分類すると摂家は六人(1 27 28 30 52 53)、清華家も六人(8 9 13 14 21 47)、大臣家は一人(33)、こまでが公で、以下の卿は羽林家が十三人(3 5 10 23 24 25 35 36 39 41 44 45 46)、名家が十一人(4 11 16 18 19 22 26 31 32 38 50)、半家が四人(40 42 43 49)である。摂家・清華家・大臣家の計十三名には全員「公」という敬称が付けられている。ところが羽林家・名家・半家の計二十八人のうち36と38のみ「公」、残りは「卿」と書かれているが、36も38も最終官職は権大納言で「卿」が正しい。これら公卿のほかには、朝臣が一人(37田向資冬朝臣)いる。彼の父は庭田重秀で、庭田家は宇多源氏の流れをくむ羽林家である。

詞書の筆者は最も高位高官の者が第一帖(桐壺)を、次位の者が

第五十四帖（夢浮橋）を担当するのが通例である。たとえば東京国立博物館蔵「源氏物語絵巻」も、五十四人の皇族・公家が詞書を担当している。その身分を調べた久保貴子氏によると、桐壺から始まって段々位が下がり、一番底辺に至ると今度は夢浮橋に向かつて昇っていく、すなわち「U字型の官位序列」になる。それに対して本画帖は、身分の順ではない。源公風もそれに気づき、末尾に「右御筆者、座次不尋常。是は銘々巻々を探り取て書給ひし成へし。」と記したのであろう。五十四枚の短冊などに巻名をしたため、それを五十四人がくじ引きのように引いたのであろう。

次に生没年を調べたところ、朝臣の37田向資冬のみ不明のため、彼の兄弟で庭田家の当主になった庭田雅純（寛永四年生）寛文三年没）による。最も早いのは30九条忠榮で天正一四年（一五八六）に出生した。以下、生まれた年を年号別に整理すると、慶長年間（一五九六）一六二四）に五人、元和（一六二五）一六四四）に十一人、寛永（一六四四）一六六四）に二十四人、正保（一六六四）一六八四）に六人、慶安（一六八四）一六九二）に三人、承応（一六九二）一七〇五）に一人、明暦（一七〇五）一七一五）に二人である。最後の二人は兩人とも明暦二年生まれで、最年少と最年長の生年の差は実に七十年もある。

没年も同じように整理すると、一番早いのは37田向資冬（生没年

不明）の兄弟にあたる庭田雅純で寛文三年（一六六三）、次いで最長老の30で寛文五年（一六六五）に数え八十歳で没した。以下、年号別にまとめると、寛文年間（一六六一）一六七三）に四人、延宝（一六七三）一六八二）に十人、天和（一六八一）一六八四）に二人、貞享（一六八四）一六八八）に六人、元禄（一六八八）一七〇四）に十八人、宝永（一七〇四）一七一一）に十一人、正徳は〇人、享保（一七一六）一七三六）に二人となる。最も遅く亡くなったのは24の享保十年（一七二五）で、最長老30の没年から六十年も後になる。

最長老の30が亡くなった年に、最年少者の二人（20、41）はまだ満九歳である。詞書を見ると、41は書き慣れた字だが、当時は九歳でもこれぐらいは書けたかもしれない。しかし20（朝顔の巻）は五十四帖中、最も複雑な散らし書きであり、果たして年少者の筆かどうか疑わしい。よって、この筆者目録は本画帖が成立してすぐに作成された、すなわち筆者を知っている人がものした可能性は低いと言えよう。

このような問題を含むが、とりあえず目録に記された人の生没年をまとめると、生年は元和・寛永年間（一六一五）一七四四）、没年は元禄・宝永年間（一六八八）一七一一）に集中していて、それによると本画帖は十七世紀半ばに成立したことになる。詞書の書風から

見ても、その頃と考えられる。

六、他の作品との比較

高橋亨氏は八件の源氏絵を取り上げ、詞書の伝承筆者を一覧表にされた。^⑪それらと本画帖とを比較すると、二件の作品とかなり重なることが分かった。それは住吉如慶筆画帖(大英図書館蔵)^⑫と住吉具慶筆画帖(茶道文化研究所旧蔵、MIHO MUSEUM蔵)で、いずれも五十四人の寄合書きである。本画帖は前者とは二十六人、後者とは二十八人も重複する。ちなみに高橋氏が調査された八件のうち三番目に多かったのは、土佐光則筆画帖(徳川美術館蔵)の十人である。

近年、欧米などで発見された「源氏物語絵巻」のうち、桐壺の巻に関しては奥書により明暦元年(一六五五)に九条幸家などが詞書を書いたことが知られている。^⑬幸家は、本画帖の詞書執筆者で最長老である九条忠栄の改名前の名前である。

本画帖は大和絵に習熟した一人の絵師による細密画であり、黒髪や屏風絵などの画中画に至るまで緻密に描かれている。また、女房装束などの衣装も有職故実に則っている反面、畳を敷き詰めたり厨子が近世の婚礼調度のようになっていたりして、近世の風俗習慣が混じっている。

中世の土佐派の源氏絵では、金色の雲が盛り上がり、絵の中にまで入り込んでいるのに対して、本画帖の雲は色紙の天地に収まり、金泥で瀟洒に描かれている。また土佐派の構図は屋根を取り払った吹抜屋台が多いが、本画帖は半数近くの図に屋根が見られる。屋根を描くのは、土佐派から分かれた住吉派の特徴であるので、本画帖は土佐派を基盤としながら住吉派の技法も取り入れたと見られる。また岩の描き方などには、狩野派の特徴が窺える。

このように各派の性格が混在する例としては、十七世紀に成立した「源氏物語色紙画帖」(海の見える杜美術館蔵)が挙げられる。^⑭それと本画帖を比較すると、場面が異なる二十五図以外はよく似ている。とりわけ第五十二帖(蜻蛉)は、絵巻物を入れた箱を挟んで薫と明石の中官が対面している、という珍しい場面である。また、馬小屋にいる二頭の馬の描き方も酷似している(第十二帖、須磨)。^⑮

終わりに

本画帖は付属の詞書筆者目録によると、十七世紀半ばに成立したことになり、詞書の書風や絵の画風からもその頃と推測される。その当時はこのような色紙画帖のほか、源氏物語本文を全文書写した絵巻物(注⑬参照)も制作された。それが復古主義によるのか、あるいは権勢の象徴なのか、いろいろ議論されているが、このように

大量生産された頃に作成された本画帖は、上等な金や顔料を用いて、細部に至るまで緻密に描かれた瀟洒な細密画である。人物の描き方は全帖を通して一貫しているので、土佐派の手法を会得して、住吉派や狩野派の影響も受けた一人の絵師の手になると考えられる。選択された図は中世以来の名場面もあれば、あまり類例のない珍しいものもあり、その意味では伝統を継承しつつ、新たに場面を開拓している。いわば伝統と革新が折衷した名品と言えよう。

注

- ① 本文は『源氏物語大成 校異篇』（中央公論社、昭和二八―三一年）により、私に句読点を付す。
- ② 近年、青表紙本について論じられているが、本稿では『源氏物語大成 校異篇』に青表紙本として収められた諸本に限定する。
- ③ ちなみに『源氏物語別本集成（正・続）』（桜楓社、平成元年）を見ると、本画帖の本文に一致する写本は、野分の巻に二本ある。それは阿里莫本と麦生本（いずれも天理図書館蔵）で、「ほのかなるあさほらけのほとに、みすまきあけて」の部分欠く。ただし麦生本はその一節が補入されている。
- ④ 『日本大学蔵 源氏物語』と題して、解説を付けた影印が八木書店より刊行された（平成六―八年）。
- ⑤ 『宮内庁書陵部蔵 青表紙本 源氏物語』（新典社、昭和四三―四五）年。
- ⑥ 書陵部本も日本大学本も実隆の手になるのに本文が相違することについて

源氏物語画帖「源氏御手か、み」（同志社大学所蔵）の紹介

- いては、池田利夫氏「三条西家青表紙証本の問題点」（同氏『源氏物語の文献学的研究序説』笠間書院、昭和六三年）などに指摘されている。
- ⑦ 田口榮一氏が作成された「源氏絵帖別場面一覧」（『豪華「源氏絵」の世界 源氏物語」学習研究社、昭和六三年）のほか、任天堂蔵『土佐光則筆 源氏物語画帖』（小学館、平成二年）、宇治市源氏物語ミュージアム蔵『伝土佐光則筆 源氏絵鑑帖』（平成三年）、『石山寺蔵四百画面 源氏物語画帖』（勉誠出版、平成十七年）、『九曜文庫蔵 源氏物語扇面画帖』（勉誠出版、平成十九年）、『源氏絵集成』（藝華書院、平成二十三年）、また承応三年（一六五四）版の挿絵（山本春正画）と、片桐洋一氏編『源氏物語絵詞』（大学堂書店、昭和五八年）も参考にした。
 - ⑧ 絵は『源氏絵集成』（注⑦）、「アナホリツシユ國文學」4（注⑬）に掲載されている。詳細は注⑩など参照。
 - ⑨ 系統別に主要な伝本を十三本翻刻した小著『源氏小鏡』諸本集成（和泉書院、平成一七年）によると、本画帖と蓬生・関屋の順が同じなのは三本、紅梅・竹河に至っては一本しかない。
 - ⑩ 「公開シンポジウム 幻の「源氏物語絵巻」をもとめて」四一頁、「立教大学日本学研究所年報」8、平成三年三月。
 - ⑪ 高橋亨氏「近世初期「源氏絵」と詞書筆者について」、「中古文学」八四、平成二年二月。
 - ⑫ 辻英子氏『在外日本重要絵巻集成』（笠間書院、平成二三年）に、カラー版で全図が掲載されている。
 - ⑬ 前掲注⑩や、小嶋菜温子氏・高岸輝氏・高橋亨氏「世界の源氏物語絵」（『アナホリツシユ國文學』4、平成二五年九月）など参照。
 - ⑭ 吉川美穂氏「新発見の「源氏物語絵巻 桐壺」——製作背景とその特質——」、「金鯉叢書」三六、平成二二年二月。また、九条幸家に関しては、杉本まゆ子氏「九条幸家と源氏物語——源氏切紙と幻の絵巻

——」(『国文目白』四九、平成三二年二月)に詳しい。

⑮ 岡本麻美氏の解説(注⑦の『源氏絵集成』所収)による。

⑯ 須磨・蜻蛉の巻は、宇治市源氏物語ミュージアム蔵『伝土佐光則筆源氏絵鑑帖』(平成一三年)とも似ている。ちなみに宇治市源氏物語ミュージアム蔵本と海の見える杜美術館蔵本は、全図がよく似ている。

〔付記〕 美術面の考察においては、雨宮六途子氏と狩野博幸氏のご指導を

仰ぎました。末尾ながら、ご芳名を挙げて深謝いたします。